居住環境の妊婦に及ぼす健康影響について
（分担研究：生活環境が子供の健康におよぼす影響に関する研究）

逢坂　文夫

要約：

最近、都市部を中心に集合住宅が林立してきており、種々の健康影響が顕在化している。その１例として、居住形態、特に居住階の上昇に伴い出生年数および流産・死産の割合に相違がみられた

見出し語：

居住形態　出生年数　流産・死産

目的：近年、人口の集中が、都市部を中心に顕著であった。しかし最近では、居住地が地価高騰などの反動で、ドーナツ化現象を示している。また第１子の出生年数は、経年的に遅延化傾向を示している。

既に我々は、居住環境の相違により出生数や異常分娩などの健康影響を報告してきた。今回は、都市部における出生年数と居住環境との関連性を検討した。

対象および方法：調査は、母子健康手帳を基に横浜市Ａ保健所管内に３年以上居住する母親（1005名）を対象に実施した。

検討項目は、年齢、結婚年齢、職業、健康状態（既往歴、妊娠）、流・死産、出生年数および居住形態（一戸建住宅、集合住宅、集合住宅の1-2 階、3-5 階、6 階以上）に分類した。

結果：出生順位別にみた出生年数は、第１子：2.00年、第２子：4.99年、第３子以上：8.17年であった。

出生年数に関する影響因子は、多岐に渡り存在する。その１例として、女性の社会進出や結婚の高齢化などもいわれている。

そこで出生年数の検討は、職歴を考慮して母親が無職および出生順位で第１子の家庭 445名を対象に行った。

出生年数をみると、合計：1.96年であった。各項目別にみると、既往歴では、あり群：2.28年、なし群：1.93年であった。妊娠異常では、あり群：2.01年、なし群：1.92年であっ

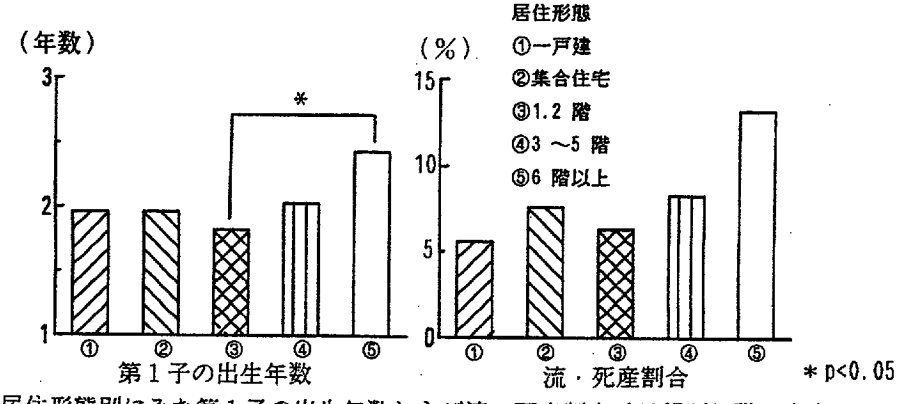
東海大学医学部地域保健学
Department of Community Health School of Medicine Tokai Univrsity

た。流・死産では、あり群：3.30年、なし群：1.85年であり、流・死産あり群が、なし群に比べ有意（p<0.001)に多かった。居住形態では、一戸建住宅：1.96年、集合住宅：1.96年、集合住宅の1-2 階：1.82年、 3-5階：2.03年、6 階以上：2.43年であり、集合住宅の6 階以上群が、1-2 階群に比べ有意（p<0.05）に多かった。

そこで出生年数に強く関与している流・死産の割合を居住形態別にみると、合計：7.2%、一戸建住宅：5.6%、集合住宅：7.6%、集合住宅の1-2 階：6.3%、 3-5階：8.3%、6 階以上：13.2% であり、その割合は、居住階の上昇に伴い増加した。なお、結婚年齢では、居住階の相違に差がみられなかった。

考察：既報告において、居住階の上昇による出生児体重値の増大に伴う異常分娩の増加や出生数の違いを明らかにしてきた。今回の事例として、第一子が生まれるまでの出生年数をみると、居住階の上昇に伴い長くなるという成績が顕在化してきた。その仮説として、①居住者のライフスタイルに違いが存在するのか。例えば、新婚生活を長く楽しみたい人々が高層階に居住するのか。②建物自身に由来するのか。影響因子のひとつとして、年数を遅延させる流・死産割合も経過年数と同様の傾向が示唆された。その原因の約6割が、染色体異常といわれており、高層階ほど、その現象が、より起り得る状況にあるのかは、明らかでない。ただし、以前に母親を対象とした調査成績からみると、居住階の上昇に伴い神経症的傾向割合の増加がみられた。また、喫煙割合の増加も示唆されている。さらに外に出にくい環境であることも明白である。推測として、高層階居住に伴い①外出頻度の減少が、②ストレスを増加させ、その解消方法として、③喫煙などに、それを求める可能性も考えられる。

今後の課題点として、それらの探究が急務である。



居住形態別にみた第１子の出生年数および流・死産割合（母親が無職の家庭）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:最近、都市部を中心に集合住宅が林立してきており、種々の健康影響が顕在化している。その１例として、居住形態、特に居住階の上昇に伴い出生年数および流産・死産の割合に相違がみられた